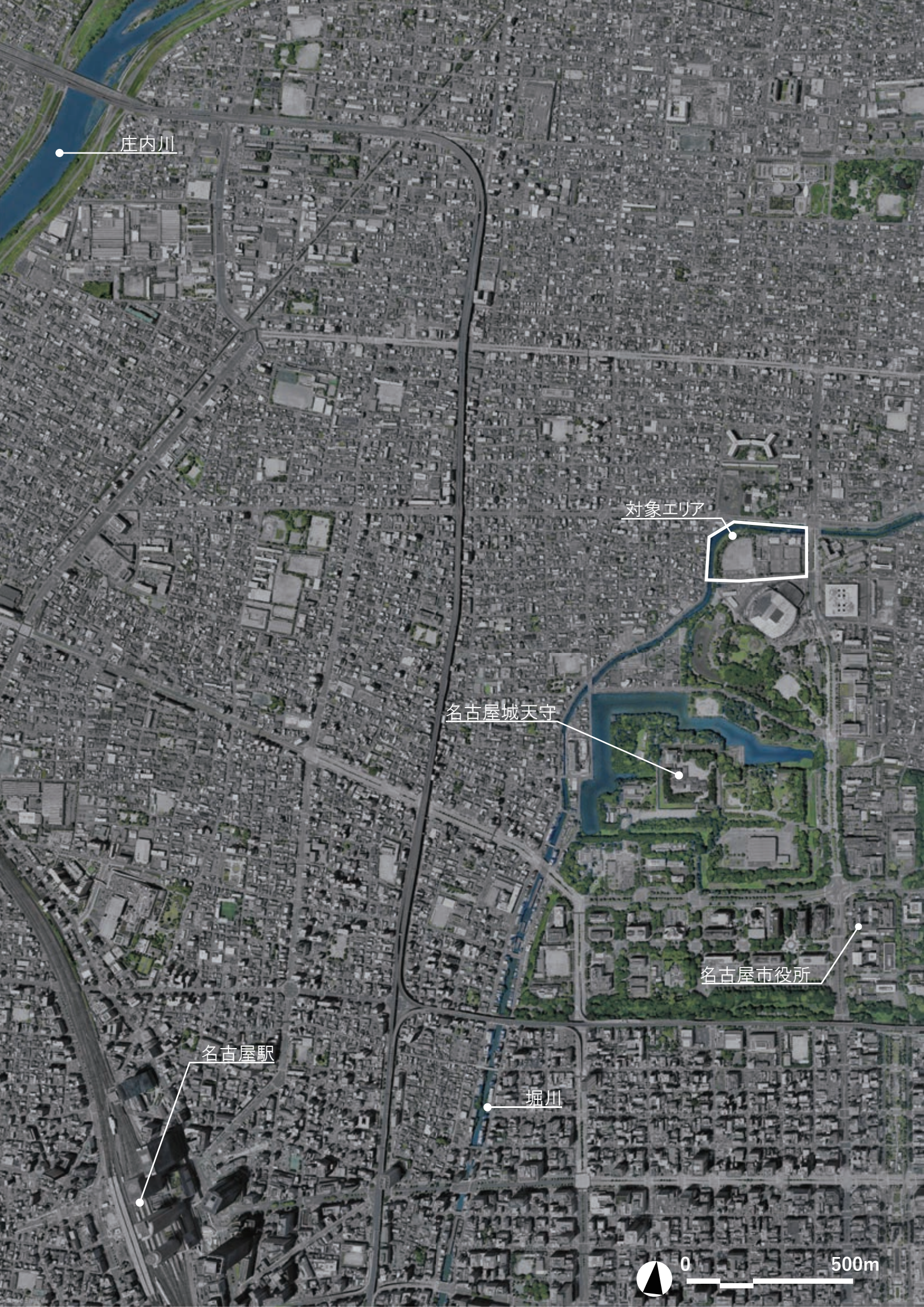


風景塾 2024
11.9-10
Record

- 生活の中のアクティビティを水辺から創造する -

風景塾
scape camp
2024
11.9-10
Record

- 生活の中のアクティビティを水辺から創造する -



庄内川

対象エリア

名古屋城天守

名古屋市役所

名古屋駅

堀川



0

500m

目次

2024 テーマ	p.01
対象地概要	p.02
プログラムと当日の様子	p.03-04
デザイン提案	
A 班	p.05-06
B 班	p.07-08
C 班	p.09-10
D 班	p.11-12
講師所感	p.13-16
協賛企業	p.17-23

生活の中のアクティビティを水辺から創造する

■ 風景塾とは

風景塾は、自然から都市に至る空間のデザインとその思考方法について、中部を拠点にデザインを志向する学生と若手エンジニア・デザイナーがともに学び、研鑽する場です。第4回は、名古屋市内をおよそ南北に貫流する堀川の上流域、名古屋城付近の水辺空間を対象に、グループワークでの実践を通じて、生活に溶け込む水辺とまちの一体的な空間デザインや提案手法について学びます。

■ 設計対象と課題設定

堀川は、1610年の名古屋城築城と時を同じくして開削され、上流部の庄内川から、名古屋城の西側を通して、名古屋都心部を南北に貫流する河川です。対象となる敷地は、愛知県体育館の新設工事が進む名城公園の北端に位置し、左岸には野球場やテニスコート、右岸には住宅地が立地しています。公園側からは水辺空間に降りることが出来る一方で、その他の場所は駐車場や幹線道路などに面する部分も多く、生活に身近な水辺空間でありながら、その役割を十分に果たせてません。商業空間でも住宅地でもない都市河川の水辺空間を私たちの暮らしの一部にどのように溶け込ませることが出来るか。今年の風景塾では、そのデザイン（かたちとしくみ）のあり方に関する提案を求めます。普段あまり気にすることのない都市の何気ない水辺空間が、市民に再知覚（reperception）され、新たなアクティビティが生み出され、周辺へ広がっていくような提案をともに考えていきましょう。

■ 対象範囲

名古屋市内をおよそ南北に貫流する堀川の上流域、名古屋城付近の水辺空間



■ 設計条件

- 計画範囲
沿川（water scape）の領域を各班で設定し、その領域について提案すること。計画区間の河川南側の敷地については、名城下水処理場及び名城庭球場の機能は維持すること。ただし、各施設の規模や配置についての改変は可能とする。
- 河川線形の改変条件
城北橋、中土戸橋の位置は変えないものとする。名城公園まで広げたグリーンインフラとして提案するとしても良い。
- 沿川道路の改変条件
対象範囲（次頁黄色枠）の外周道路は歩道まで改変可とする。
- 設計条件の見直しは可能であるが、変更により生じた課題を解決しうる代替案を提示すること。

対象地概要



① 堀川

庄内川から、名古屋城の西側を通って、名古屋都心部を南北に貫流する河川。



② ごみキャッチャー

潮の干満を利用してごみを収集する装置。落ち葉やごみを除去しヘドロ発生を防ぐ。



城北橋

②

中土戸橋

対象地

④

(当時工事中)

⑤

③



③ 名城公園/御深井池

76haの広さをもつ緑豊かな公園には名古屋城が一望できる御深井池、Park-PFI施設tonarinoなどがある。



④ IG アリーナ

隈研吾が手掛けた17000人収容の多目的アリーナ。2025年度開業。



⑤ 名古屋造形大学

2022年からこの場所へ移転。アート、デザイン、マンガ、建築など幅広い造形分野を実践的に学べる。

10:00～ ガイダンス：趣旨・設計条件など



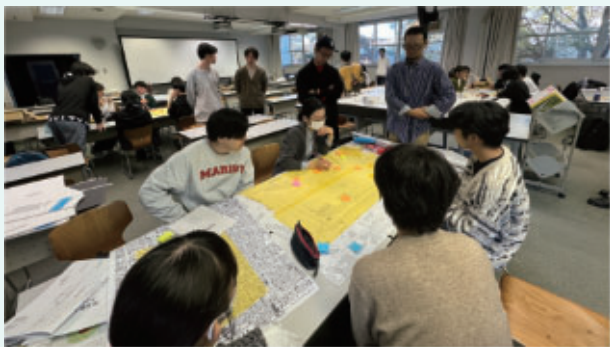
風景塾いよいよ開講。秀島講師による趣旨と設計条件のガイダンスから。期待と緊張のスタートダッシュです。

13:30～ レクチャー：視野を広げよう（出村）



はじめのレクチャーは、オランダ帰りの出村講師。現地のリアルを知り、豊かな水辺空間の解像度が高まりました。

15:00～ エスキス①(コンセプト・ダイアグラム)



アイデアをはじめて講師陣に披露。考えることの多さに圧倒されつつも、方向性が少しずつ見えていきます。

18:00～ 中間発表(コンセプト・ダイアグラム)



初めての全体共有会。どの班もユニークな視点からコンセプトを練っていて、どのような空間ができるかととても楽しみです。

10:30～ サイトの視察



秀島講師と川口講師による現地案内。現状や課題を肌で感じながら、敷地の将来イメージを膨らませます。

14:00～ スケッチによるアイデア出し作業



現地調査で得た気づきを思い思いに描き出し、ひたすらプレストを積み重ねます。

16:00～ 作業



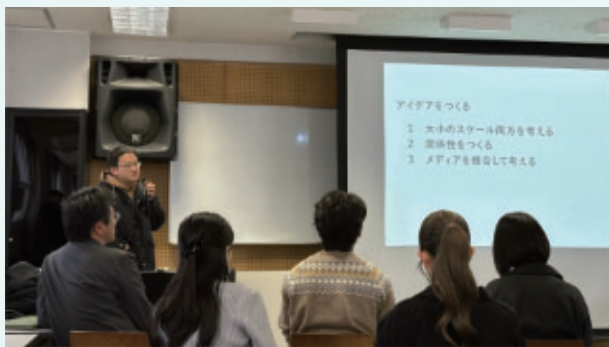
エスキスを受け、各班の様子に変化が…講師陣からのアドバイスが起爆剤となり議論がぐんと深まります。

19:00～ レクチャー：2日目に向けて（大前）



1日目の締めくくりは大前講師による講義。実務経験を通して語られた人の居場所づくりから、新たな空間を思い描きます。

9:00～ レクチャー:プレゼンテーション(大野・伊藤)



大野・伊藤講師のレクチャー。聞き手の想像を掻き立てることがよいプレゼンのコツ！心に留めながら2日目スタート。

11:00～ 作業



最後のエスキスの時間は刻一刻と迫ってきます。なかには、昼食も忘れるほど手を動かし続ける班も現れはじめ...

15:00～ 作業



残り1時間半！バタバタと手を動かしながらも、「仕上げるんだ」という想いがチームを1つに。疾走感のあるラストスパート！

17:50～ 全体講評・授与式



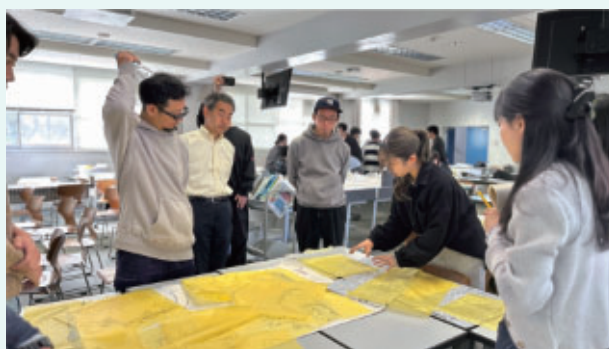
発表を終えての講評・授与式。たった2日間ではありましたが、チームとして団結と達成感を感じられました。

10:00～ エスキス②(空間設計)



水辺で過ごす人々のアクティビティに視点を向けるきっかけになり、抽象的な構想から具体的な設計へと動き出します。

14:00～ エスキス③(取りまとめ)



提案の全体像を捉えつつここから細部をどこまで詰められるか。講師陣と議論を重ね、葛藤の末、ついに決断します。

16:30～ 最終発表



いよいよ集大成のお披露目。水質・生態系・地形など多様な視点から、暮らしに寄り添う水辺の風景を考える時間となりました。

19:00～ 懇親会



風景塾の締めくくりは、ともに過ごした仲間と！2日間の感想などを語り合いました。同志志を持つ仲間に乾杯！

A 班 水質が変える暮らしの変化

Oh! ふろ けい
御深井賞

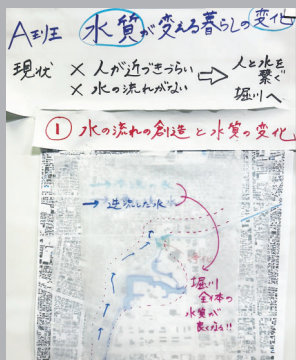
青木真穂 柳澤木乃音 笠原 健瑚 渡玲菜 大澤誠

コンセプト

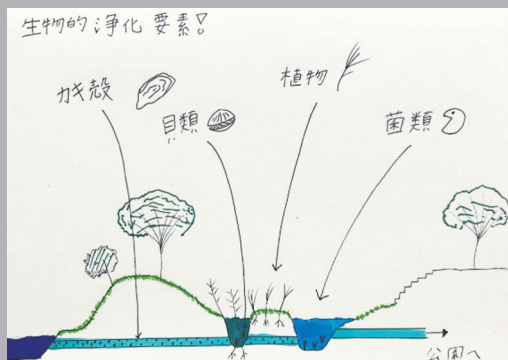
現状の「近づきづらい」堀川を改善するためのキーワードとして私たちは「水質の改善」に着目し、対象敷地に浄化装置のような遊水池を設置することを提案しました。この遊水池は現状の堀川の水を一部引き込み、植物の機能を中心とした生物浄化によって水質の浄化を行います。そしてその水は名城公園の水辺、名古屋城水堀を通過し堀川に戻す事で一体の水質の改善を行う機能を有します。また、今まで心理的にも物理的にも距離があった水辺を身近にすることで、公園の水辺を含めた水域のアクティビティを豊かにし、対象地を中心とした周辺環境も改善します。

提案内容

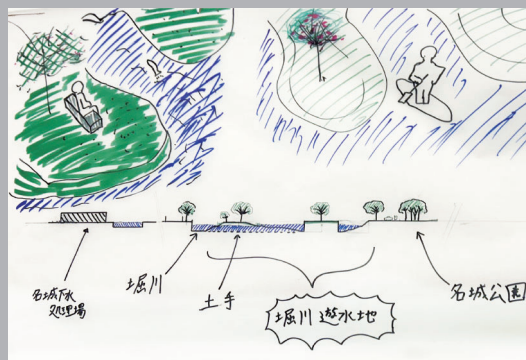
堀川の水を引き込む遊水池は水質浄化面積の拡大とアクティビティの豊かさを確保するため、有機的な形状の堤や島を盛り上げました。南東（模型写真奥側）に向かうにつれて水質が良くなり、それに伴って水に浸かるなどの親水アクティビティが生まれる事を目的として水面までの緩やかな傾斜を設けました。また、干満差によって徐々に見え隠れする道・中島等の縦方向の空間の変化つけ、時間によるアクティビティの変化が生まれるよう心がけました。



水の流れの創造により、最終的に堀川全体の水質が浄化されるプロセスをダイアグラムにて説明しました。



水質浄化のプロセスに参加している生物や要素を図式化しました。生物浄化というコンセプトのなかの一言に関係している要素の例示によって水質浄化のプロセスの具体的なアプローチを示しました。



アクティビティの具体的な図式化と断面図による設計地の雰囲気伝えることを目的とした一枚。現在の堀川本流に対し、規模の大きな水辺を生み出すことで、堀川本流と箱となった体験ができることを抽象的に説明しました。

質疑応答（最終発表）

Q. 提案された水辺空間の構成が、名古屋全体の水システムと連動している点がとても印象的でした。特に池の形状がシンボリックで、都市に対する強いメッセージを感じます。この池の形状や構成は、どのような意図やプロセスで設計されたのでしょうか？また、堀川の水の導入・浄化の流れや、干満など自然環境との関係性についても具体的に教えてください。

A. 池の形状は、堀川の水が一時的に入り、浄化され、再び流れるというプロセスを反映した設計です。三次構造を持ち、第一段階で水を受け止め、第二段階で浮島などを通じて浄化し、第三段階で下流へ流す構成としました。また、干満差が約 2m ある点を活かし、浮島が時間とともに沈んだり現れたりする仕掛けを盛り込んでいます。この動的变化が、空間体験に季節性や時間性を与え、自然と人間の関わりを強く意識させる空間になるよう意図しました。

Q. 池のデザインについて、有機的で自然に溶け込むような形状が採用されていたことは理解しましたが、人工物であることを前提に、敢えて幾何学的な形状や構造的な対比を取り入れて面白かったのではないかと感じました。滞留空間や居場所の設計において、形状・材質の選定やその意味付けをどのように考えたのか、また、それによってどういった体験や空間的な効果を期待していたのか、もう少し詳しく伺えればと思います。

A. 模型では主に有機的な形状で構成していましたが、実際の設計意図としては、幾何学的な四角いデッキやあずまやを池の周囲に点在させ、自然形状とのコントラストをつけることも含んでいました。特に干潮時に現れる道沿いに、人工的な構造物を配置することで、時間の経過とともに現れる「場」をつくり、変化のある空間体験を演出します。材質も柔らかいものと硬質なものを使い分け、質感の対比を通して、人がとどまりやすい場所や動きやすい場所を明確にしようと考えていました。



作業風景



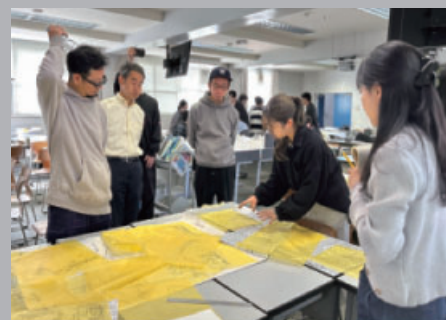
【現地視察】

堀川、名城公園の水辺、名古屋城水堀は流動性が乏しく、ヘドロの沈殿・水中酸素濃度の低下・悪臭問題など水質状態がよくないことがみてとれました。また全体的に柵や堀など水辺への距離感があり勿体無いと感じました。これらを設計地から一体として改善出来ないかと考えました。



【作業】

理想的なアイデアと現実的なスケール感や作業計画の二面を意識して活動しました。班員が作業を分担しそれぞれが得意な作業に集中することで活動をスムーズに行うことができました。



【エスキス・中間発表】

作業の分担によってチーム内の方向性が乱れてしまい時間をロスしてしまいましたが、エスキスによってその食い違いに気づいてからは素早く方向修正することができました。エスキスや発表の際は常に方向が定まっていなかったためうまく言葉にできない場面が多くありました。

受講生のコメント



普段の業務では制約に縛られがちですが、専門分野が異なる班のメンバーと視点を変えながら自由に発想し提案内容を作る経験ができてとても良かったです。また、イメージをいかに相手に伝えるか、などプレゼンのテクニックについても学ぶことができたので今後活かしていきたいです。
(株式会社オリエンタルコンサルタンツ 青木 真穂)

初めて異なる分野の知識や意見をもった者同士での制作作業を通して建築というものの自体の捉え方も広がったような気がします。その中で自分の意見を伝えるために必要な知識やスケッチ技術などのアウトプットする能力も大切になってくると感じました。グループ活動をする中で、多数決ではなく個々の考え方を混ぜ合わせながらも全体としてまとまりをもたせる難しさとそれが合わさった時の面白さを体験でき、とても良い経験になりました。

(名古屋造形大学 柳澤 木乃音)

学生及び社会人の双方の視点からランドスケープ空間の在り方を考えることができました。今後もこのようなイベントで様々な方と交流し、視点や考え方を更新し空間とは何かを問い続けていきます。
(株式会社 malbadesign 笠原 健瑚)

たった 2 日間の中で、グループの皆と議論を重ね、一つの成果を創り上げる過程は非常に大変でしたが、パースを用いたコミュニケーションや、プレゼンの仕方、模型製作方法など多くの新しい知識を吸収することができました。

(中央コンサルタンツ株式会社 渡 玲菜)

実務経験のある異業種の社会人の方々との関わりは今まで経験が無く、経験から来る認識の違いや優先順位の差は勉強になる体験となりました。そういった考えの擦り合わせを行うことの難しさと楽しさを学んだので、今後は積極的にディスカッションを行えるグループの環境づくりを意識していきたいです。

(名古屋市立大学 大澤 誠)

B 班 水辺を活かした新たな日常の場 with 堀川

風景賞

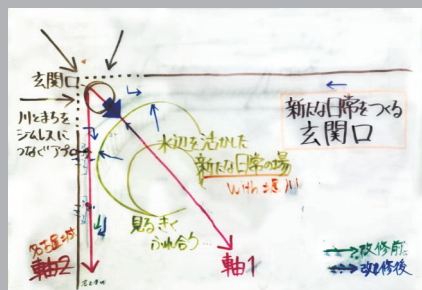
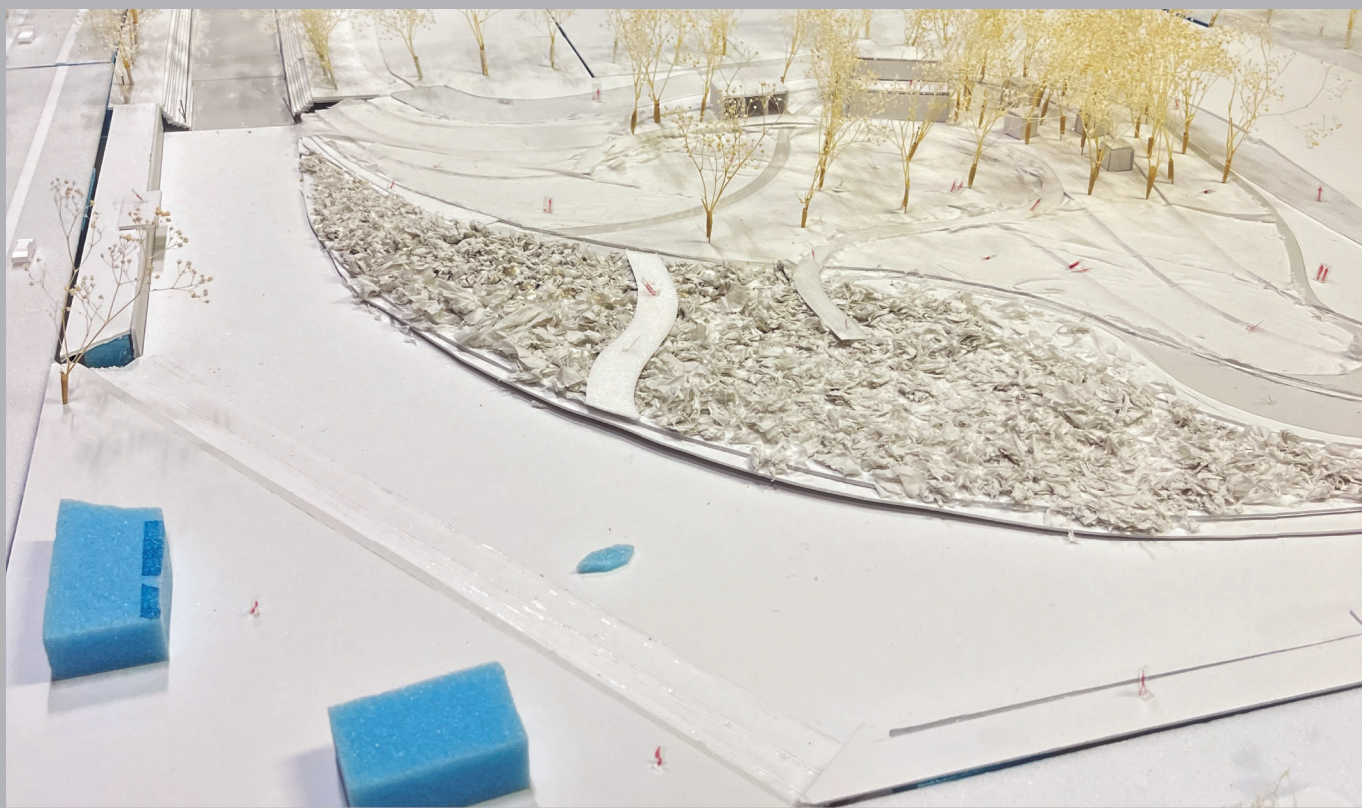
青木佑太郎 大野有輝 唐木田耕大 細谷雪野 守田賢司

コンセプト

本計画地は、南側で IG アリーナの建設が予定され、堀川沿いも樹木や護岸で覆われているため、川が存在に気が付かず、将来的に誰も寄り付かない名城公園の裏側になることが懸念されます。この課題を踏まえて、IG アリーナ側の利用者にはあえて焦点を当てず、北側に抱えている住宅側に対して、堀川の水辺がある新たな日常を提供する場をコンセプトに計画を行いました。新たな日常を提供するための場の入口として北西角にエントランス機能を持たせ、川を越え、公園内で遊び場、コアワーキングスペースなどが広がる空間としました。

提案内容

本提案では堀川を挟む両岸を一体的に捉えた空間構成としました。護岸デッキは川沿いの高低差による分断を乗り越え、水辺へと自然に引き込まれる動線を意図しています。また堀川を渡った先には、水位の変化を受け止める湿地帯が広がり、訪れた人々が水辺の表情の変化を身近に感じながら、穏やかに過ごせる環境を整えました。水辺を媒介し周辺エリアをゆるやかにつなぐことで、川とともにある日常の風景を広げることを目指しました。



ダイヤグラムでは、北西角の用地にエントランス要素を持たせ、川へのアプローチ箇所を増やしました。また北側の居住者へのアプローチ強化とエントランスから川への接続をシームレスにし、北側の住民に対して堀川の水辺を活かした新たな日常の場を提供する案としました。



ゾーニング図では日常を家と見立て、家の間取りを意識したゾーニングを行いました。ゾーニングの中で、見る・聴く・触れるを通して、水を感じられる仕掛けを行い、エントランスから川を渡ることによって堀川が存在を知覚し、堀川がある新たな日常を提供する公園計画を行いました。



広場の緩傾斜と湿地帯により現状の水面と地形の高低差をならし、エリア全体の空間的な接続性を持たせています。微地形を流れる小川や池を楽しみながら、広場側からも堀川を眺められるようなデザインを意識しました。

質疑応答（最終発表）

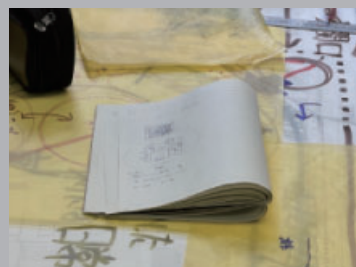
Q. 提案された空間において、玄関部分が非常に重要な役割を果たしていると感じました。特に模型にあった3つの建物について、それぞれがどのような機能を持ち、空間のにぎわいや人の動きをどうデザインしているのかを伺いたいです。また、周囲との関係性や視線の流れなど、建物の配置や構成によって意図した空間の演出についても具体的に教えてください。

A. 建物は一つにまとめたもので、普段は飲み物を配るような軽いサービスを提供し、休日にはキッチンカーを呼んでにぎわいを演出します。建物の位置は、北側から歩いてくる人々や、川沿いをジョギングしている人々が自然に立ち寄れるように配置しました。また、テラス席から川のアクティビティが見える構成とし、「ここに行ってみたい」と思わせる視線の導線を意識しました。空間の重層性と連続性によって、にぎわいと川の風景がつながる場を目指しました。



Q. 現在の提案では、玄関から水辺エリアへの接続手段が飛び石や船のみで、特に子ども向けの仕掛けとしては面白いのですが、一般利用者には入りづらい印象も受けました。川を隔てる演出意図は理解できますが、利便性と演出性のバランスについてどのように考えていたのかを伺いたいです。また、他の接続手段やアプローチ案などの検討があったのかについても教えてください。

A. 堀川は手つかずの自然が残る貴重な場所と捉え、その存在を強く意識させるため、あえて簡単には渡れない設計にしました。橋や通路を安易に設けると、川を単なる通過点にしてしまうと考え、飛び石や船といった能動的な手段を通じて、川との関わりを生み出すことを重視しました。ただし、誰もが使いやすい場をつくるという観点からは不自由さが残るのも事実で、他にも浮桟橋のような提案も出ていました。デザインにこだわった一方で、今後の改善点として受け止めています。



作業風景



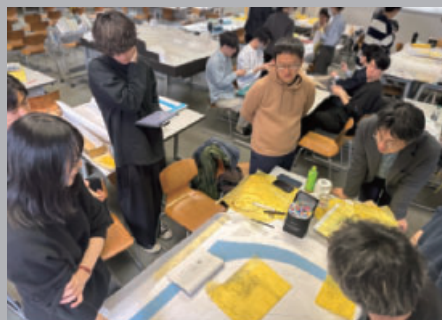
【現地視察】

柵や護岸、繁茂した雑草によって、堀川が両岸から切り離された空間になっていると感じた一方で、堀川沿いを散歩する人や、風呂敷を広げて食事を楽しむ姿など、堀川に根づく日常の営みも垣間見えました。そうした営みを広げ、周辺エリアをつなぐ水辺空間が必要だと考えました。



【作業】

時間の制約がある中で、模型作りやポスター制作など、各々が分担して作業を行いました。結果、クオリティの高いものを製作することができましたが、途中で班のコンセプトがあいまいになったり、班の中でも解釈に違いが生じたりするなどの課題もあり、共同作業の難しさを感じました。



【エスキス・中間発表】

1日目の中間講評で中村先生がおっしゃった「風景が見えてこない」という言葉がとても印象に残っています。文章で考えをまとめてはいても、パース等が1枚もないことが伝わっていない原因を作っていたんだと痛感しました。景観の検討をしていく中では、ビジュアルで伝えていくことが大切だと学びました。

受講生のコメント



風景塾を通じて、デザインを具体化する力や知識が足りていないと感じました。アイデアを空間設計に落とし込む力は、理論等の知識の取得と演習を重ねる中で培われると思いますが、ワークを通じてメンバーの方々と実践的に経験できたのは貴重な機会になりました。

（岐阜大学大学院 青木 佑太郎）

自分の専門分野外の方々と実際に社会で活躍されている方々と議論ができ、多くの刺激をもらえたと同時に、自分がいかに狭い世界で勉強しているのかということを実感しました。今回の貴重な体験と先輩から聞いたことを胸に、今後の自分の研究や進路選択に生かしていければと思います。

（名古屋大学 大野 有輝）

バックグラウンドの異なるメンバーと活発な議論ができ、充実した二日間でした。議論はしたものの空間に落とし込めなかったアイデアも多く、ダイアグラム・パースなどビジュアルでのコミュニケーション力の重要性を強く感じました。

（株式会社オリエンタルコンサルタンツ 唐木田 耕大）

予め計画や条件を明らかにし、一步一步手順を踏んで、現実的な案を導く。当たり前ですが、出来ていなかったと実感しました。今回の学びを胸に、理想を現実へ変えてゆく手法を模索し続けたいと思います。コンサル、土木の考え方が全く異なる方々との答えのない議論はとても楽しかったです！ありがとうございました。

（名古屋市立大学 細谷 雪野）

風景塾では、学生の柔軟な発想力とにかく驚かされました。手順やセオリーに縛られず、良いと思ったことや面白いと思ったものに徹底的に向き合い、追及していく姿勢がとても刺激になりました。たまには根拠が無くても、いいと思った感性を大切に仕事に取り組んでいければと思います。

（日本工営都市空間株式会社 守田 賢司）

C 班 ホットで小さな溜まり場

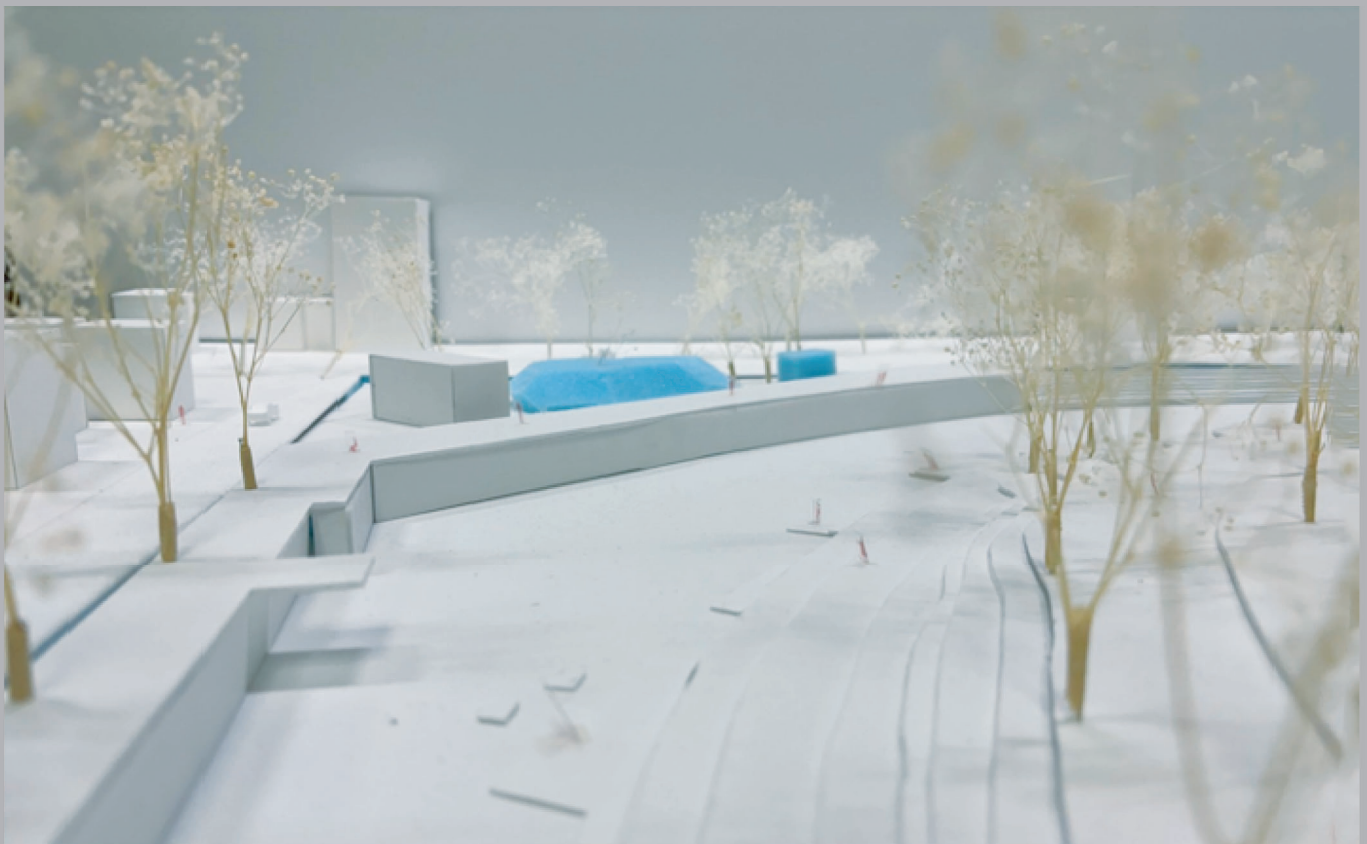
桐山日菜子 香田拳斗 信野翔満 細江真生 宮川朗

コンセプト

現況ではおふけ池を中心とする名城公園中心部に人の回遊が集中しており、建設中の IG アリーナの裏側に位置する対象区域では、公園利用者にとって利用目的がわかりづらく、隠されるような存在になっていくことが想像されます。また、名城公園中心部では、ピクニックや子供の遊び場、ランニングなど大小さまざまな賑わいのアクティビティが存在します。以上より対象区域では、南側からの分かりやすい導線とランドマーク、都心部の賑わいを忘れ一人ゆっくりできるような滞留空間を創出を提案しようと考えました。

提案内容

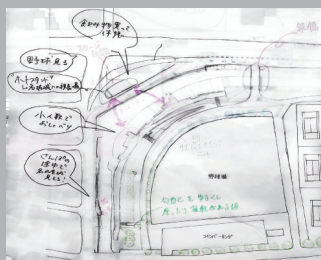
対象地南西から北を見えています。凹凸を持った張り出しデッキと栈橋は、歩いていて飽きない小さな溜まり場となります。交差点と河川が屈曲する間にできる空間にはアイキャッチとなるステージ”おふけ石”が見えます。視点場を高くするステージは、名古屋城を見る絶景ポイントとなるとともに左岸側、交差点側から見られる添景の役割も果たしています。



コンセプトである「ホットで小さな溜まり場」には、まち歩き、現況分析でメンバーが感じた南側の大人数でにぎやかな風景と対比し、少人数でゆっくりできる空間にしたいという願いが込められています。北側は既存の施設を活かした日常的な利用と自然を活かした静かな空間を活かし、駅前には後に完成する IG アリーナや tonarino を活かしたアクティブや観光地に、そして 2 エリアに挟まれた空間を家族やグループで遊びに来られるような空間構成を考えました。



デザイン全体を示す鳥瞰図です。三角地の整備により不要になった自動車道路は自転車専用道路として再整備しました。草を残しつつ小さな居場所になるようにつくった栈橋は今まで近づけなかった水への接近を可能にしました。



平面図とそこで起きるアクティビティを示した図です。全体として、見る見られるの関係が成立し歩いていて楽しい空間づくりを意識しました。南から来た人は川幅を広げたことで三角地の石を見ることができ、そこまでの道中では張り出しデッキと細やかな栈橋により飽きずにおふけ石まで行くことができます。

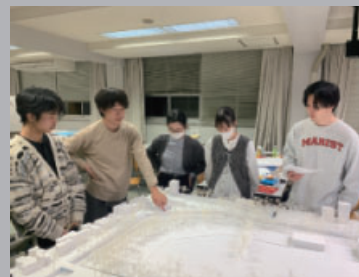


コンセプトと現況分析のダイアグラム。コンセプト「ホットで小さな溜まり場」には、まち歩き、現況分析でメンバーが感じた南側の大人数でにぎやかな風景と対比し、少人数でゆっくりできる空間にしたいという願いが込められています。

質疑応答（最終発表）

Q. この計画において、空間を日常的に利用するであろう主な層はどのような人々と想定されていますか？たとえば地域住民やスポーツ利用者など、具体的な人物像や利用のされ方があれば教えてください。また、整備によって新たに訪れる人々と、これまでの場所を親しんで使ってきた人々が、どのように共存・共生していける空間になるよう設計したのか、その意図を詳しく伺いたいです。

A. 利用者層としては、住宅街に住む地域住民や、スポーツ施設で運動した後に訪れる人々、近隣をランニングする層などを想定しています。また、整備によって来訪者が増えても、以前から親しんできた人たちが使いにくくならないように、既存の利用パターンを大切にしつつ設計しました。視線の通し方やベンチの配置などを工夫し、新旧の利用者が自然に交差し、気持ちよく共存できる空間を目指しています。賑やかな場所と静かな場所を分け、どちらの層にも心地よい居場所があるよう配慮しました。



Q. 張り出した岩盤のような構造物や、三つの立体的なボリュームがとても印象的でした。これらは建築なのかオブジェなのか、あるいは居場所としての機能を持つのか、役割が多様に見えました。それぞれの形状や素材にはどのような意図がありますか？また、それらの要素が空間の中でどのように働き、人々にどんな体験を与えるのかについても、もう少し具体的に教えていただければと思います。

A. 三つの立体は、居場所・ステージ・ベンチなどを兼ねた多目的な構造物です。特に岩のような大きなボリュームは、視覚的アイコンとして、球場側・住宅地側どちらからも見える位置に置くことで、空間のつながりを強調しています。素材感としては自然石のような質感を想定し、柔らかさと硬さを併せ持つ存在にしています。遠目には彫刻のように見えつつも、近づくとも腰かけたりくつろげる居場所となることで、風景と人の活動を橋渡しする「場」の核となることを意図しています。



作業風景



【現地視察】

対象範囲の河川は濁っているものの sup などアクティビティを考えながら整備することで、水があるというポテンシャルを生かした提案ができると感じました。また名城公園の入り口から対象地までの導線がわかりやすく、導線整備の必要もあると感じました。



【作業】

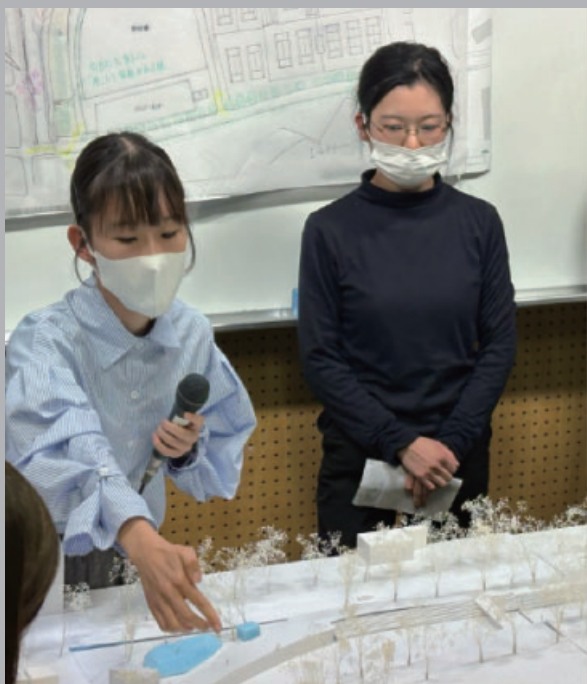
前提となる対象地の捉え方、そこから生まれるデザインのコンセプトがメンバー全員が納得できるまで議論することを意識しました。2日間という短い期間であるため終盤は模型が得意な人は模型作業ペースが得意な人はスケッチと分業で効率よく進めました。



【エスキス・中間発表】

大野先生の「想定しているアクティビティとハード整備の規模感を一致させる」というアドバイスが印象的です。このエスキス後から広い対象地の一部を徹底的にデザインすることを決め、アクティビティにあった小さな居場所を作ることができました。

受講生のコメント



エスキスで段階を踏むよう助言いただき、班で率直な意見を貰うことで学んだ、素直に・かつ点を押さえることを、伝える提案のために意識していきたいです。そのうえで、俯瞰して自分たちの核を見つけることが大切だと感じました。ほか、見立て・アクティビティ等まで、学びの多い2日間でした。

（株式会社ティコク 桐山 日菜子）

対岸を橋ではなく飛び石で繋ぐ等の自由な発想には感心させられました。この自由で創造的なバックキャスト思考は、今後自分が重要視したいテーマのひとつでもあります。設計的な思考と自由で創造的な発想を両立させ、自分の強みとしていきたいと思っています。

（中央コンサルタンツ株式会社 香田 拳斗）

初めて訪れた場所かつ2日間でのデザインは難しいこともありましたが、普段の研究室とは違うメンバーと協力しながら考えていくことができたので学びも多く良い経験になりました。どのようなアクティビティが起きてほしいかを考えて空間を考えていくプログラムも今後の勉強になりました。

（早稲田大学大学院 信野 翔満）

分野が異なる方や社会人の方と意見を交換し作業を進めるのは大変面白かったです。データの収集やプレゼン能力、設計の観点など、皆さんから学ぶ点が多かったです。このような機会は学内ではなかなかない為、貴重な経験をする事が出来ました。

（名古屋市立大学 細江 真生）

異なる分野の方々、社会人の方々と一緒に作業をし、今まで考えることがなかった視点から対象地のデザインを考えることができました。各々の得意な技術を出し合っこのメンバーでなければできない最終成果物を作ることができ、レクチャーや懇親会も含め多くのことを学ぶことができた密度の濃い2日間になりました。

（岐阜大学大学院 宮川 朗）

D 班 自然との再会

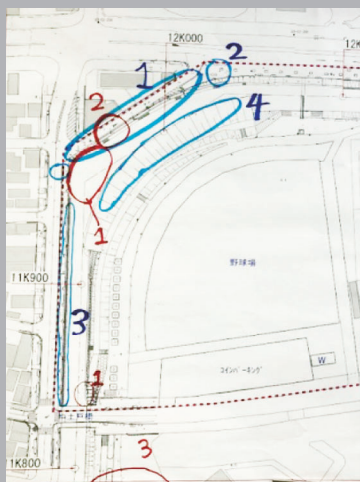
青木陸 小野寺湧 児玉創 小松優馬 清水滉祐 沼口絢

コンセプト

対象地区は、都市部に唯一の自然と触れ合えるスポットにもかかわらず、人々の利用が少ない地区でした。そのため、長所としては、都市部にある唯一の自然と出会う場所、課題としては、身近にあるにもかかわらず水辺にアクセスしにくい点が挙げられます。また、私たちの班ではアクティビティ創生の観点から「人の日常生活（ウォーキング、休憩、水辺で遊ぶ、芝生広場で遊ぶ等）」＝「アクティビティ」と位置づけました。以上の点から、自然環境が豊かな点に着目し、人と生き物が同じ空間に自然に共存し、触れ合えるような整備を目指しました。

提案内容

河川の線形を人工的な直線や鋭角なカーブから、より自然な形状へと変更することで、水生生物や水鳥の生息環境を改善します。また、川沿いにデッキや遊歩道を整備し、人々が水辺に親しみやすくすることで、人と自然のつながりを深めます。さらに、野球場を広場へと転用し、多様な人々が集まりやすく、くつろげる空間を創出することで、地域の魅力と公共空間の活用を高めます。



今回の計画地の課題点とポテンシャルと思われる点を平面図上に丸で囲みました。青で記載しているのが課題点、赤で記載しているのがポテンシャルです。丸の横に書いてある数字は左写真の課題とポテンシャルの数字と対応しています。



人と生き物の場所をバランスよく存在させることに注目し、等高線も含めて提案を考えました。

- ・人の場所づくり：
歩道がない場所に設置したデッキや西側に設置した遊歩道、野球場を無くして広場や小さな丘、歩道沿いに木やベンチを設置して日陰で休憩できる場所を設置しました。（パース：整備後に広がる風景）
- ・生き物の場所づくり：
デッキや遊歩道沿いに植栽を、遊歩道沿いには亀が休める石段を設置し、また潮位で変わる生息している小川を設置することで小魚の生活や移動ができる箇所を増やしました。（断面図：潮位差を利用して生まれた小川や湿地）

質疑応答（最終発表）

Q. この計画では、干満による水位の変化を積極的に活用するというアイデアがとても興味深く感じられました。具体的にどのくらいの水位差を想定し、どの範囲まで地形や施設に影響を与えるのか、構造的な想定を教えてください。また、その変化によって生まれる体験、特に子どもたちがどのように遊んだり学んだりできるのか、想定しているアクティビティも含めて具体的に伺えればと思います。

A. 想定している干満差は約2メートルで、満潮時には水が広がり、干潮時には道や島が姿を現します。これを活かして浮島や小高い丘を設置し、子どもたちが水辺の環境と関われるようにしました。生き物に触れたり、丘に登ったりして遊ぶなど、変化する地形そのものが学びと体験の場になります。また、周辺には子ども広場や観察ポイントを配置し、動線の中で自然と触れ合える構成にしています。日常的な遊びの中に自然への気づきが生まれる、環境教育の要素も込めています。

Q. 空間の広がりや地形の変化が非常に印象的でした。特に芝やヨシ原の扱いなど、地面の素材と管理の方針が空間の雰囲気 zu 大きな影響を与えていると感じます。全体をどういった素材で構成しているのか、また、どこを積極的に整備し、どこを自然のままに残すかなど、管理の強弱の考え方について教えてください。さらに、水辺に近づく体験や、視線の抜けの演出についても具体的に伺いたいです。

A. 全体的には芝を基調にしつつ、ヨシなどが自然に戻りそうなエリアは敢えて手を加えず、自然の回復を促す計画です。人が多く集まる場所や滞留が予想されるエリアは積極的に整備し、利用頻度に応じて管理の強弱をつけています。平地部分からは水が直接見えにくくなっているため、階段やスロープを通じて下りながら水辺が徐々に見える構成にし、空間に奥行きとストーリー性を与えました。視線の展開と動線の変化を通じて、水と人との距離感を体験的に感じられる設計を目指しました。



作業風景



【現地視察】

現地を訪れて川は人間のためのものだけではなく、生き物の住み家にもなっていると感じ、そこから生き物が住む自然と人間のアクティビティを上手に融合した案が作れないかと考えました。生き物が集まる居場所や人間の視点場になるような居場所を見つけ、地図にプロットしました。



【作業】

チームのみんなで意見を出し合うことを意識して取り組みました。同時に、その中で意見をまとめていくことの難しさを感じました。2日目の昼からは最終プレゼンに向けての準備に取り掛かり、コンセプト作り、図面、模型に分かれてチームで分担しながら、作り上げることができました。



【エスキス・中間発表】

先生方へ見てもらう際には、自分たちの思いをまず伝えることを意識して話しました。先生方から受けたアドバイスに対して鵜呑みにするのではなく、そこから自分たちの案にはこれが必要だねと班で話し合って決めました。スケッチが魅力的だとおっしゃっていただいたので、そのイメージを中心に案を作り上げました。

受講生のコメント



土木分野の目線と建設・デザイン分野の目線の違いを学ぶことができたと思います。利用者の目線や作りたいコンセプトの風景を思い浮かべて設計することは新鮮な気持ちで取り組むことができた、一方で難しく思いました。それぞれの立場・スキルを活かして作業に取り組みましたが、手伝えることが少なかったため、自分のできる分野を広げていきたいと感じました。
(株式会社テイク 青木 陸)

グループワークに苦手意識があった自分を変えたくてこのワークショップに参加しました。限られた時間や材料、機材の中で自分のできることを探し、メンバーと協力し合い、いかに良いモノをつくることができるか。今回のワークショップでは自分の実力をチームのために出し切り、納得がいくモノをつくることができた気がします。

(信州大学 小野寺 湧)

川やそこに棲む生き物の目線にも立ち、人と自然の関係性を考えたプランニングの経験は少なく、非常に勉強になりました。それは分野や立場をまたいだ議論を行ったからこそだと思っています。ダイヤグラム等のメディア作成のスキルアップを図り、今後一技術者としてもっと成長していきたいと思っています。
(中央復建コンサルタンツ株式会社 児玉 創)

学校内では得られない、違う立場の人達との作業はとても刺激になりました。自分が目標に掲げた積極的に取り組むことを今回の風景塾で達成でき、一つまた成長できました。魅力的なスケッチは人の心を動かすと直接体感し、自分も人の心を動かせるスケッチで自分の思いを伝えられるようにしたいと思いました。
(名古屋市立大学 小松 優馬)

土木のアプローチでしか河川を考えたことがなかったので、風景や計画の要素も織り交ぜて水辺空間を考えることが難しかったですが、新たな視点が広がり、とても刺激になりました。また、2日間という短い時間で課題を仕上げる必要があり、コミュニケーションを積極的にとることの重要性を改めて実感しました。
(名古屋大学 清水 湊祐)



実行委員長

秀島 栄三

名古屋工業大学

直角に曲がった、不自然きわまりない川、堀川。裏を返せば大がかりに人の手が増えられたもの／場所であり、何を考えてそのようなかたちにしたのか思いを馳せてみるのも楽しいことです。

風景塾で皆さんにさせていただいたことは単に造形するということではありませんでした。自然的条件と社会的条件を踏まえ、手を加えることの方法と意味を考え、川を、地域を広い意味で使用する人々とそのアクティビティに合うよう造形するということでした。

人々もアクティビティも時代とともに変化します。堀川は都市河川としてよくある、いわゆる人々に背を向けられた川でした。“背を向けられる”の反対は、川が視野に入る、川を眺め（ようとしてみ）る、川沿いを歩く、川で釣りをする、川に手足を入れる、川に入る、泳ぐといったことだと思います。泳げるようなレベルに到るまでに何十年かかることでしょう。ヘドロ、悪臭が減り、少なくとも SUP を漕いで楽しめる、そのような川になるまでにおよそ 20 年がかかりました。

このように多様に変化する川というものを風景という中でどのように捉えられたでしょうか。景観、植生、流れ、水質、地域との関係性... と考慮すべきことは実に多元的です。実際に皆さんは、水質をよくする流れをつくる、西方の住民もアプローチしやすくするなど十分に多面的に考えられていたと思います。デザインをしようとするならばこれら全体を見据える総合的な視野が必要になります。

大学での研究は反対に分析的です。要素に分解し、見えにくいものを見いだすという方法がよく用いられます。分解して考えたり縦割りの感覚をもったりしてはよい風景にはならないでしょう。また、大学での研究はしばしばレトロスペクティブです。すでに生じた事実を証拠に用いることが多いからです。それに対して風景塾ではプロスペクティブ、すなわち今後を見通すことも求めました。おそらく慣れなかったことではないでしょうか。

後世に残る、という大げさですが多くの人が価値を感じる風景になるかといったことを作業中に振り返って俯瞰することも大事なことでした。とはいえ時間が限られているところで立ち止まって考えるのは難しいことです。しかもグループワークですのでみんなの合意を得ながらことを進める必要もありました。

かくして日常とは違う取り組みを 2 日間にわたって体験していただきました。いかがだったでしょうか。今後の仕事に、学業に必ずや役立つと信じています。



ゲスト講師

大前 貴裕

ミュキデザイン

土木・建築・ランドスケープは、空間デザインを扱うという意味では共通の土俵にいるはずなのに、意外と協働の機会が少ないと感じていたので、「風景」というテーマでコラボレーションするとても刺激的な企画だと感じ初めて参加させていただきました。加えて理想を自由に追求できる学生と、現実のジレンマに直面した若手社会人が入り混じって2日間セッションするというのも、またないチャンスであり、講師として参加した自分自身もとても学びのある時間となりました。今回のサイトはまちなかに流れる小さな川であり、隣接する公園からつながる豊かな緑地帯が好印象であるものの、下水処理施設と隣合わせであることや、ハードな護岸がむき出しになっているなどネガティブな条件もあり、その中でいかに人の居場所をデザインしていけるかが焦点だったと思います。フィールドワークから始まり、ワークショップ、ドローイング、模型製作、プレゼンシート作成をポキャブラリーの異なるメンバーが意見をぶつけ合いながら手を動かす流れは、他では得難い貴重な体験になると感じました。提案はどの案もコラボレーションの妙を感じられるものばかりで、多様な視点があるからこそその成果であったと思います。このような領域横断で空間デザインをする場が、実務でも増えていくことを今後期待するとともに、自分自身も働きかけていきたいと感じました。



伊藤 維

名古屋造形大学

今年は、街中の人工的な小さめの川とその周辺という、私自身とても考えがいのある課題でした。大きな川よりも生態系などへの介入を想像できるし、対岸との関係も考えられる。親水公園のように設えられる平面もある。都市・防災インフラ機能もある。人間以外の居場所をたくさん考えることが、人間の暮らしや環境の豊かさにつながる感じもある。そのような「自然」と「人為」が混ざり合った状況で、水の浄化システム等に言及したアイデアが特に印象に残りました。いっぽうで全体的にやや根拠の少ない有機的な線が多い気がしました。この場所では地面にもう少し大ぶりで人為的な線思い切って引き、断面を操作しても良いのではないかという気がして、いま振り返って、そのような建築と土木・ランドスケープの関係について想像をしています。ともあれ、たいへんおつかれさまでした。多様な方との濃密な共同設計が、ほかに得がたい学びの場になっていたら嬉しいです。



大野 暁彦

名古屋市立大学

今年は社会人の参加が多かったことが印象的でした。学生も例年同様に土木・建築・ランドスケープの各分野からの参加があり、東海エリアでこうした場を今年もセットできたことは良かったと思います。また今回のテーマ是水辺でしたが、単なる親水といったことではない周辺地域との接続を踏まえた多様なアイデアが出てきたことも2日間のワークショップにして素晴らしい結果だと思います。プレゼンテーションにおいては大きな共通模型があったことでヒューマンスケールでの議論ができたことは、デジタル技術がさまざまできている社会の中でも未だ模型によるコミュニケーションの重要性がみとれました。一方で、水系を扱ったにもかかわらず広域的な展開や分析には全体的に不足を感じました。オーソドックスな方法論やアイデアなどでも全体に対する提案があり、それがどう対象地の具体的なデザインと呼応しうるのかまで議論ができるとよりレベルの高い成果につながっただろうと思います。



川口 暢子
愛知工業大学

暮らしの中のアクティビティを水辺から創造する一昨今の都市河川には2つのことが期待されています。ひとつは、いわゆる治水・利水・環境といった水環境システムを安全に構築すること。もうひとつは、人々の日常生活の質を高める機能を備えていることです。風景塾には、土木・建築・ランドスケープ・芸術といったさまざまな土壌を持った方々が参加されます。学生、社会人ともに、思考の拠り所は確かにそうした教育文化の背景にも垣間見えます。例えば、建築を勉強する学生さんは、インフラや公共空間、そこにある自然環境、人々の交流に興味関心を持ちながら、「住まう」「生活する」という視点は決して逃しません。インフラの中にも上手に住まい方の提案をします。また、土木の学生さんは、より広域的な視点を持ち、提案する場所が都市・地域の中でどのように「システム」として機能するかを考えるのが得意です。風景塾は、そんな魅力的な人々が交流し、対話し、2日間の短い期間で熟議する場です。さらにどんな役者がいるといいか…と考えてみると、やはり現場に関わりのあるさまざまなステークホルダーでしょう。そうした方々は、インフラが抱える3つ目の視点、維持管理について深い思いやアイデアを持っています。風景塾はつくり手を育てる場でもありながら、つくり手の幅を広げる場にもなれたらというのが今回の気づきでした。



出村 嘉史
岐阜大学

絶妙な課題だったと思います。河川、道路、公園などの枠を越えなければ新しい魅力的な空間を生み出し難いけれども、越えるならば周りの環境を読み込んで、それらの節点としての場を創造できる。その特性景としての場所をどうデザインするか。みなさん、楽しみながら、苦しみながら、果敢に挑んでいました。コンセプトの段階では、みな面白いところまで至りました。休息場、自然再生、なんと生物浄化による水質改善まで。一方で、お題の「アクティビティ」に対する確度を上げるところまではなかなか難しかったようです。アクティビティの様子を明瞭に想像（妄想？）することは、これからの公共空間づくりに携わる者としては、とても重要な素養になると思っています。水辺を作ることに取り組むならば、そこで時間を過ごす人の姿をまず描いてほしいものです。その姿がぼんやりしていると、いい形（分野によっては、安全・安心基準の形）を作ったのだから、人がそれに従えばいい！と開き直ってしまうかもしれません。多くの場合、思い描けるアクティビティの姿は、それまでの自分の経験してきたことや、見てきた衝撃的な風景に引きずられます。ですから、新しい場所を想像するには、自分にできる限りの遊びを経験する必要があります。たくさん外に出て遊びましょう。そしてそれぞれ目の前の現場で、生活の中にセンスの良い場所をデザインして、まちを満たしてください。



中村 晋一郎
名古屋大学

なぜ日本の水辺はこんなにも無機質でつまらないのだろうか。防災が重要、管理が大変、事故があったときの責任、理由を挙げればキリがない。一番の問題は水辺の可能性、より良い水辺について考えるをやめてしまったことだ。硬直した思考、体制、社会を動かすためには、恐れを知らない自由な発想とそれを形にするデザインの力、そして仲間が必要だ。参加者の皆さんが示した堀川の姿は自由な発想に溢れていたし、デザイン力の評価は他の講師に委ねるとして、皆さんは仲間を見つけた。週末だけで都市の水辺を設計しろというなんとも無茶で不親切で過酷なプログラムに参加する、参加したいと思うような奇特定の人物を社会の中で見つけるのは、実はそう簡単ではない。皆さんがその事実気づくのはもう少し先かもしれないが、是非、ここで出会った仲間とのつながりを大切にしてほしい。あなたがこの先、硬直した思考、体制、社会に出くわした時、きっとこのつながりが助けになるはず。



安田 尚央
ミュキデザイン

今年は水辺やアクティビティといったキーワードでしたが、河川空間の検討には治水に加え、生態や水質など環境的側面をどのように豊かなものにしていくか。それぞれが関係し合った最適解を見つけられるかが魅力的な河川空間の創出に繋がります。また敷地に接する道路や公園などの施設を与条件として取り入れ、提案できる能力も重要となります。

公共空間のデザインには専門性と広い知見が必要で、それは経験の蓄積によるアイデアで解決するしかありません。日々何気なく生活している空間にもたくさんの経験が溢れています。気持ちよく感じる空間や疑問に感じることを蓄積し、提案へと昇華させてください。風景塾での議論も経験の蓄積として役立つことを期待しています。



協力

井村 美里
水辺とまちの入口 ACT

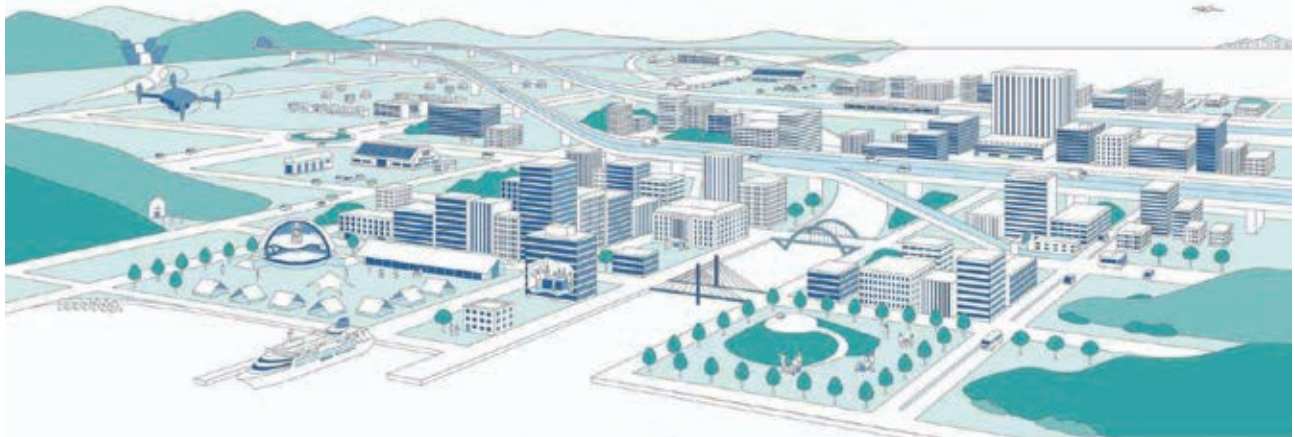
「生活の中のアクティビティを（堀川の）水辺から創造する」という課題は、堀川の歴史や背景を知りすぎた私たちにとっては容易ではなく、大きな期待を持って関わらせてもらった。

受講生からは、河川に隣接する公園や道路も含めて広く捉える視点や、人が水辺に近づく動きを誘発するしかけ、逆に水位変化により水際がまち側に近づいてくる、といった積極的な水との関わりが提案された。目先の安全や管理コストに偏りがちな従来の整備とは一線を画し、30年、50年先の豊かな暮らしを想像できるような、水辺の価値を高める工夫が盛り込まれた自由な発想に共感し、水辺の自由と可能性を再認識する機会になった。

会場には模型やメモ、スケッチなどが散乱し、名古屋の水辺がワクワクになるパーツが詰まっていた。社会基盤を作り出す現場にも、風景塾のような場が増えることを期待したい。

世界の人々の豊かなくらしと 夢の創造の実現に貢献する

私たちは、日本トップブランドの技術をもとに、安全・安心・快適・活力があり、
魅力ある持続可能な社会の実現のために新たな社会価値を創造し続ける会社を目指します。



社会価値創造企業へ
「革新」と「実証」と「挑戦」、そしてビジョンの実現

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
ORIENTAL

1954年の創業以来、測量事業を源流に、
様々な建設コンサルティングを手掛けてきたテイコク。
私たちの強みは、確かな調査に自由な発想を掛け合わせた
「**根拠をもとにした新たな提案**」です。

その提案を確実に実現する技術力、対応力にも多くのお客様から信頼
をいただき、公共事業から民間事業まで、数々の実績を積み重ねてきました。

調べ、考え、解決し、評価する。私たちはこの一連の流れを重視し、
ワンストップで一つひとつの建設事業を手掛けております。

【業務分野】

インフラ・防災分野
プランニング・建築分野
環境分野
調査測量分野
情報分野



BIM/CIM（橋梁配筋図）

ソリューションパートナーズ
株式会社 **テイコク**



どうしたら まちをもっと よくできるだろう。

大日コンサルタントは、その問いを熱意に変え、
未来へつなぐ持続可能なまちづくりの仕事をしています。

社会資本整備

「社会資本」とは、生活環境や経済活動の基盤、すなわちインフラストラクチャー、インフラを指します。
そして、わたしたち大日コンサルタントはその社会資本整備の一端を担っています。

事業フィールドは、国土

自然豊かな日本、その美しい国土を守りながら、
まちをもっと安全に、まちをもっと快適にしたい。

事業フィールドは、地域社会

地域の特性を活かし、地域が抱える課題に取り組み、
まちをもっと活気を、そこに暮らす人々をもっと笑顔にしたい。

その「もっと」を実現するため、
建設コンサルタントであるわたしたちは、お客様の技術パートナーとして、
社会資本の計画・調査・設計・維持管理など、建設全般にわたる仕事をしています。
更には、これまで培ってきたコンサルティングのノウハウを活かし、
地域おこしや海外への技術支援、脱炭素社会への取り組みへと活動の領域を拡げています。

わたしたちは、創業より70年に渡り、時代の遷り変わりと共に、事業と技術をアップデートしてきました。
まちに新しい価値と文化を創出することが、わたしたちの使命です。

真に豊かな未来をつくるため、
わたしたちはプロフェッショナル集団として、持続可能なまちづくりに挑戦し続けます。
これからも感謝の気持ちを忘れずに、熱意を持って邁進していきます。

わたしたちの探求心が、明るい未来の一步となる。

まちを、一步前に。

DAINICHI
大日コンサルタント株式会社



Corporate Site



Instagram

THE URBAN INSTITUTE
SPACIA
株式会社 都市研究所スペースシア

信頼のもと、
社会になくてはならない
企業グループに

防災・減災の
社会課題を解決する

人と自然が
微笑む

誠実に、
現場、人、失敗、学び
社会に貢献する

安全、安心、快適な
社会の創造

橋梁の
プロフェッショナル

大地と空間、
人と社会の可能性を引き出し、
未来を拓く

地質に強い
地盤に明るい



大日本ダイヤコンサルタント株式会社
Dia Nippon Engineering Consultants Co., Ltd.



中央コンサルタンツ株式会社

この地に誇る仕事
未来を見つめた豊かな人間環境の創造



本社：名古屋市中区丸の内三丁目22番1号
TEL：052-971-2541
<https://www.chuoh-c.co.jp>

都市計画に関する業務実績

BUSINESS GUIDE

リニア岐阜県駅周辺におけるエリアデザインの検討及び駅前広等の公共施設の基本設計

【R1～R3 岐阜県中津川市】リニア岐阜県駅周辺エリアデザイン検討業務



来訪者を迎える新たな宿場町



「清流の国ぎふ」を体現する場所

造園に関する業務実績

BUSINESS GUIDE

まちに潤いを与える公園の設計・マネジメント

金公園再整備事業
実施設計
岐阜県岐阜市

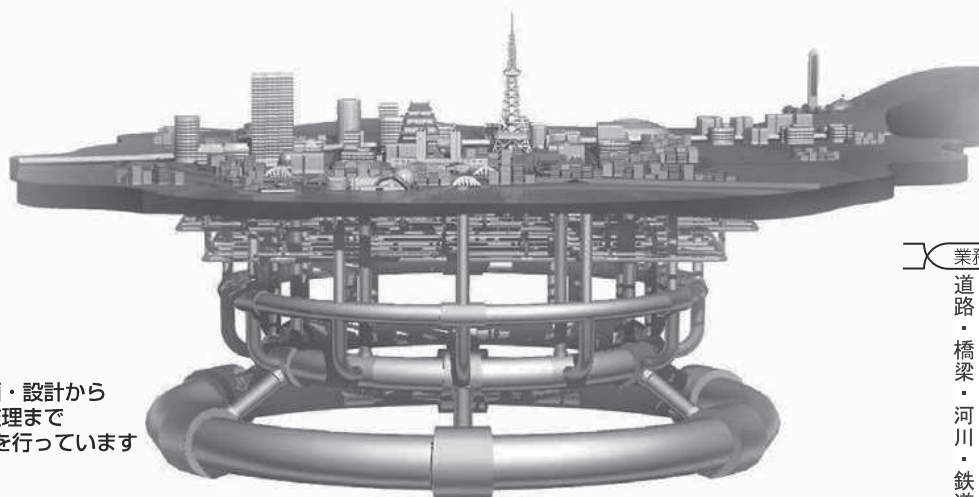


熊野灘臨海公園
(城ノ浜地区) プール設計
三重県紀北町
三重県尾鷲建設事務所



水と生きる

調査・計画・設計から
施工監理まで
一貫した業務を行っています



おかげさまで60年



業務内容
上水道・下水道・工業用水道
廃棄物処理・廃水処理
道路・橋梁・河川・鉄道等公共事業全般



人・街・自然・いきいき

中日本建設コンサルタント株式会社

代表取締役社長 庄村 昌明

品質基本理念／顧客に信頼と満足を提供

品質基本方針／顧客第一、品質向上、社内協調

本社／名古屋市中区丸の内一丁目16番15号 ☎ 052-232-6032(代)
東京支社／東京都千代田区五番町14 ☎ 03-6261-3710(代)
大阪支社／大阪市中央区内本町1-3-5 ☎ 06-4794-7001(代)

<https://www.nakanihon.co.jp/>

NITTO

橋梁・ペデストリアンデッキ
次代をつなぐセラミックス



床タイル：フルモジュール FK-1010-M3
武蔵野の森総合スポーツ施設【東京都調布市】

視覚障害者誘導用タイル 景観色追加



株式会社 ニットー
CERAMIC TILE FOR LANDSCAPE

本社：岐阜県土岐市駄知町1707-2 TEL 0572-50-1550
営業所：東京、仙台、大阪、福岡
<https://www.nitto-web.jp>



誠意をもってことにあたり、技術を軸に社会に貢献する。



NIPPON KOEI
URBAN SPACE



日本工営都市空間株式会社

〒461-0005 愛知県名古屋市中区東桜二丁目17番14号 新栄町ビル

会社代表
ランドスケープ・建築部

(052)979-9111
(052)979-9306



miyukidesign inc.

ないものはつくろう あるものはいかそう

<https://miyukidesign.com>

風景塾 2024 ユース運営メンバー

青木 佑太郎

大澤 誠

加藤 丈太郎

駒月 健太

小松 優馬

鈴木 裕也

沼口 絢

菱田 佑樹

細江 真生

堀江 晃生

松沼 花奈

宮川 朗

山田 蓮人

渡 玲菜

風景塾 2024 Record

□発行日

2025 年 8 月 1 日 発行

□主催

風景塾実行委員会

□記録誌編集担当

【風景塾ユースメンバー有志】

青木 佑太朗

堀江 晃生

宮川 朗

山田 蓮人

□問い合わせ先

Email : fukeijyuku.chubu@gmail.com



風景塾
-scape camp